開催趣旨

『里山環境における鳥獣害の課題』

ワークショップ企画者
丸山　徳次・須川　恒

「共生をめざすグローカル大学」を基本理念とする龍谷大学は、昨年（2004年）、文部科学省私立大学学術高度化推進事業への採択を得て、里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター（略称「里山ORC」）を開設しました。里山ORCは「里山をめぐる人間と自然の共生に関する総合研究」をテーマとし、諸成果を広く一般に公開することを目的としています。

さて今般、里山ORCワークショップ「里山環境における鳥獣害問題の課題を探る」を開催することになりました。万葉集の歌の中にも語られているように、昔から里山では野生鳥獣との軋轢の中で人々の生活が営まれてきましたが、近年特に大型獣（シカやイノシシ）による農業被害が頻発したり、昨年秋のようにツキノワグマが里地におりてきたことが大きな話題となっています。とりわけ昨年のクマ異常出没の問題に関しては、里山林の放置・荒廃が、野生動物の行動圏の変化に関係しているのではないか、という議論がなされていますし、究極的には日本の林業全体の問題と関わっている、ということも指摘されています。

現代における「里山」の捉え方は、余りに林学的な見方によって規定されすぎているきらいがありますが、里山が人間と自然との相互作用システムの一形態であり、「地域生態系」としての性格を持つ以上、「里山をめぐる人間と自然の共生」を追究する里山ORCにとっては、地域の野生動物との共存・共生の問題を無視することができないと考えています。そこで、里山環境における鳥獣害問題が、里山学・地域共生学にとって重要な諸課題を突きつけるものと考え、その課題を探る目的で今回ワークショップを企画しました。里山ORC研究スタッフともども課題の発見に努めたいと思います。

まず、鳥獣害問題を順応的管理手法で解決することを目指している特定鳥獣保護管理

計画の概要を、環境省の横山昌太郎氏に紹介していただきます。この計画でも重視しているように、鳥獣害問題は、種別の生態的特性の違いはもちろん、地域個体群の実態を把握することが前提となります。この点について、ツキノワグマの地域個体群別による被害発生特性の違いを中心に大井徹氏に話題を提供していただきます。

鳥獣害問題は里山環境の管理と深い関係があることを、滋賀県のイノシシ被害の現場に関わって調査を進めておられる野間直彦氏からうかがいます。また、イノシシ問題を中心に環境社会学的視点から研究を進めておられる百合野（赤星）心氏から、問題解決にあたっての人と野生動物の関係のあり方について問題提起をしていただきます。

また、滋賀県においても深刻なカワウ問題に関して、特定計画の指針づくりに関わった須川恒氏より問題解決に向けての課題を指摘していただきます。

さらに関係者からのコメントを得て、里山環境における鳥獣害問題に含まれる課題を整理したいと思います。